

# 作成中のケース教材（後ほどWebサイトから開いて投影）

## ケース1 漢字は手で書かなければならない？

### ケースを読む前に

- ①あなたは手で文字を書くことが困難な学習者に接したことがありますか。その学習者は具体的にどのような困難を抱えていましたか。
- ②手で文字を書くことが困難な学習者は、言語学習を行ううえで、どのような困難があると思いますか。
- ③言語を学習するうえで、文字を手で書くことは必要だと思いますか。それはどうしてですか。

学習障害の一つに手で字を書くことに困難を抱える書字障害があります。外国語の学習に限らず、学習においては、これまで伝統的に、板書を書き写す、手で書いて覚える等、手で書くことが重視されてきました。しかし、近年の急速なデジタルデバイスの発展により、学習において、手で書くことは必ずしも必須ではなくなってきています。BYOD (Bring Your Own Device) を推奨する教育機関も多くなってきました。一方で、特に日本語教育や中国語教育、あるいは国語教育において、漢字を学習する場合、手で書くことが必須であると考えられる教師も多いようです。

本ケースでは、手で文字を書くことに困難を抱えた学習者に関するケースをおとして、学習障害を抱えた学習者を包摂することの意味や多様性と言語教師のピリーフの関係を考えます。

### ケース1:「パソコンで入力する期末試験」を希望します。 山本千里

わたしは大阪にある学生数の多い私立の総合大学で、非常勤講師として中国語を教えています。おもに第二外国語として中国語を学ぶいろいろな学部の学生のクラスを担当しています。この大学では、第二外国語を必修にして2年間学ばせる学部もあれば、必修は1年間で2年目以降は自由選択にしている学部もありますし、完全に自由選択の学部もあります。選べる第二外国語は、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語です。

必修にしている学部の学生の動機づけの強さはさまざまで、熱心に授業に参加する学生もいれば、必修なのでいやいや参加している学生もいます。ただ、熱心に授業に参加している学生であっても、コースが終了した後も学習を続ける学生はほとんど少ないと思われまます。

わたしが担当する経済学部1年生のクラスに中野さんという学生がいます。彼は「手書き」を苦手としています。このクラスは、中国語未習者のクラスで、週に2回の授業があります（もう一方の既習者クラスは他の教師が担当しています）。ありふれた構造中心の入門用教科書を使い、知識を問う筆記のテストと、パフォーマンスを回帰させて、それらを併せて評価しています。受講生は30名ほどです。

中国語は漢字で表記するため、中国語の学習には漢字を手で書く作業が欠かせません。中国とシンガポールで使われている簡略化された字体の漢字（簡体字）にせよ、台湾と香港で使われ

## ケース2 スケジュール管理が苦手で、忘れ物ばかり

### ケースを読む前に

- ①あなたは今まで友達との約束や課題の提出を忘れてしまったことがありますか。普段、あなたはスケジュール管理で工夫していることはありますか。
- ②いままで、スケジュール管理に苦労している人が身近にいましたか。また、そのような人は、大学生活や言語学習などの授業の場で、どのような困難に直面すると思いますか。
- ③あなたは自分が担当している学習者の件で、大学や教育機関から「配慮申請」を受けたことがありますか。その「配慮申請」に対して、あなたはどのように対応しましたか。
- ④時間や期限を守ることに、日本の社会通念ではどの程度重要視されていますか。「自己管理ができない人」はどのようなイメージで捉えられているでしょうか。

発達障害の一つにADHD（注意欠如多動性障害）があります。この障がいの主な特徴として、不注意や多動性、衝動性が挙げられます。これらの特徴は、家庭教育や本人の努力とは無関係に生じるものです。さらに、不注意が原因となる物忘れによって、日常生活に支障をきたすことがあります。具体的には、友達との約束や締切を忘れる、約束の時間に遅れる、などです。

スケジュール管理に関しては、この障害を持つ人は一般的に「時間感覚に鈍いこと」があります。例えば、外出するときに、自分では「まだ余裕がある」と思って別のことを始めたり、身支度に時間がかかって自宅を出る時間を過ぎてしまい、遅刻をしてしまうことがあります。また、課題の提出がある場合には、課題があることを忘れて、課題が多すぎるとパニックを起こして、何から手を付けたらよいかわからないままに時間が過ぎることも往々にしてあります。また、たとえ締切日を知っていても、「締切まであと〇日」という実感を掴みづらく、その結果として提出が間に合わないということも起こります。

次に紹介する事例のように、既に診断がついている学習者の場合には、大学の学生課を通じて、授業担当教員に「配慮申請」が寄せられることも増えてきました。ですが、その具体的な配慮の方法が一律的で、学習者本人の支援として十分でないこともあります。

このケースで問題になっているのは主にスケジュール管理の問題です。これは言語学習だけではなく、大学生活、ゆくゆくは社会生活でも問題になる重要な事柄です。このケースでは、学習者が学習をよりスムーズに行い、より良い大学生活を送るための支援の可能性と、その際に教師として学習者の自律を促す教育者としての葛藤について考えます。

### 問 A. 個人レベルの問い

Q1: 鈴木さんは、課題が出た時と課題の締切前に、どのように考えていますか？鈴木さんの心の内を想像してみましょう。

Q2: スケジュール管理について、鈴木さんが今までに授業でどのような対策を取ってきたと思いますか？

### 問 B. 学習空間レベルの問い

Q1: あなたの授業に参加している学習者の「多様性」には、どのようなものがありますか？

Q2: この授業が2限目でなく、他の時限だったら、昼休みの活用以外にどんな対応が考えられますか？

Q3: この大学では、多様な学生に対応するために、配慮申請をどう改善したらよいでしょう？

Q4: 鈴木さんのような学生でも、留学を含めたより良い大学生活を送るために、大学全体としての仕組みやサポートについて、何が必要でしょうか？

### 問 C. 社会レベルの問い

Q1: 鈴木さんは「人と一定以上に親しくなるのを避ける」と言っています。具体的にどのようなトラブルが起きたと考えられますか？そのような状況が起きるのは、ダイバーシティ、インクルージョンの観点から見て、社会的にどのような問題があるでしょう？

Q2: スケジュール管理がうまくいかない人が身近にいた場合、「自己責任」だと一方的に片づけても良いでしょうか？「自己責任」と言われる背景には、どのようなものがあるのでしょうか？

Q3: 時間や期日を守ることは、日本社会ではどの程度重要なことでしょうか？他の国ではどのように考えられていますか？もしあなたが日本以外の国で暮らした経験がある場合、その国と日本を比較してください。

### ディスカッション

これまでの「問い」を参考に、考えてみてください。

Q1: どのような授業なら、鈴木さんのような学習者も参加しやすいでしょうか？

Q2: 鈴木さんを含めた多様な学習者が過ごしやすい大学はどのような場でしょうか？あなたは大学のファカルティメンバーとして、大学にどんな改善を提案しますか？

Q3: 多様な人たちが生きやすい社会はどのような社会でしょうか？あなたが所属している社会が「こうなったら良い」と思うのは、どんな社会ですか？また、その社会を実現するためには何が必要でしょうか？

\*\*\*\*\*

### ケースの解説

#### <ADHD について>

発達障がいの一つに ADHD（注意欠如多動性障害）があります。この障がいの主な特徴として、不注意や多動性、衝動性が挙げられます。これらの特徴は、家庭教育や本人の努力とは無関係に生じるものです。さらに、不注意が原因となる物忘れによって、日常生活に支障をきたすことがあります。

# ケーススタディの目的

- 学生の抱える困難に直面することになった**教員、事務職員**の**困惑と試行錯誤**を語ったナラティブを、事例として提示するケース教材を試作した。
- この事例は、ある教員のナラティブというスタイルを取るが、**その内容は、当事者のナラティブを再構成して視点を変えたもの**である。ケースの中に事務職員の考えなども入れ、FD・SD参加者の当事者性を高めた。

# Purpose of the case study

- We created discussion material in narrative form that presents trial and error process to handle confusion of faculty and administrative staff who came to face the difficulties of students.
- This case takes the style of a teacher's narrative, but its content is constructed from the narrative of the persons with disabilities involved and presented from a different perspective. The ideas of the administrative staff were also included in the case so that FD and SD participants are more actively involved.

# ケーススタディの目的

ケースを媒介に**対話と省察**を行うことをとおし、  
教育関係者に**大学や教室をインクルーシブな学習  
環境に変えていこうとする意識を醸成していくこと**  
が本ケーススタディの狙いである。

# Purpose of the case study

The aim is to foster awareness among educators of the details of transforming universities and classrooms into inclusive learning environments through discussion and reflection on the presented case.

# 本ケース教材が想定している3つのレベル

ナラティブをリソースとする教材として、八木（2022）では、

ミクロレベルの活動（気づく・共有する）

メゾレベルの活動（表現する・関係を作る）

マクロレベルの活動（発信する・つなげる）

に分けて、各ストーリー（日本に移住した方が実際に語った語り）について学生が話し合うことが提案されている。本ケース教材では、これを参考に、以下のような3つのレベルでケースを分析できるような問いを設定する。

# The three levels envisioned in this case study material

For teaching materials that use narrative as a recourse, Yagi (2022) suggested that students should discuss each story (actual stories told by people who moved to Japan) in the three following levels:

**Micro-level activities (noticing and sharing)**

**Meso-level activities (expressing and creating relations)**

**Macro-level activities (presenting and connecting)**

In this example material, we have set up questions that allow us to analyze the example at the three levels based on the model suggested by Yagi.

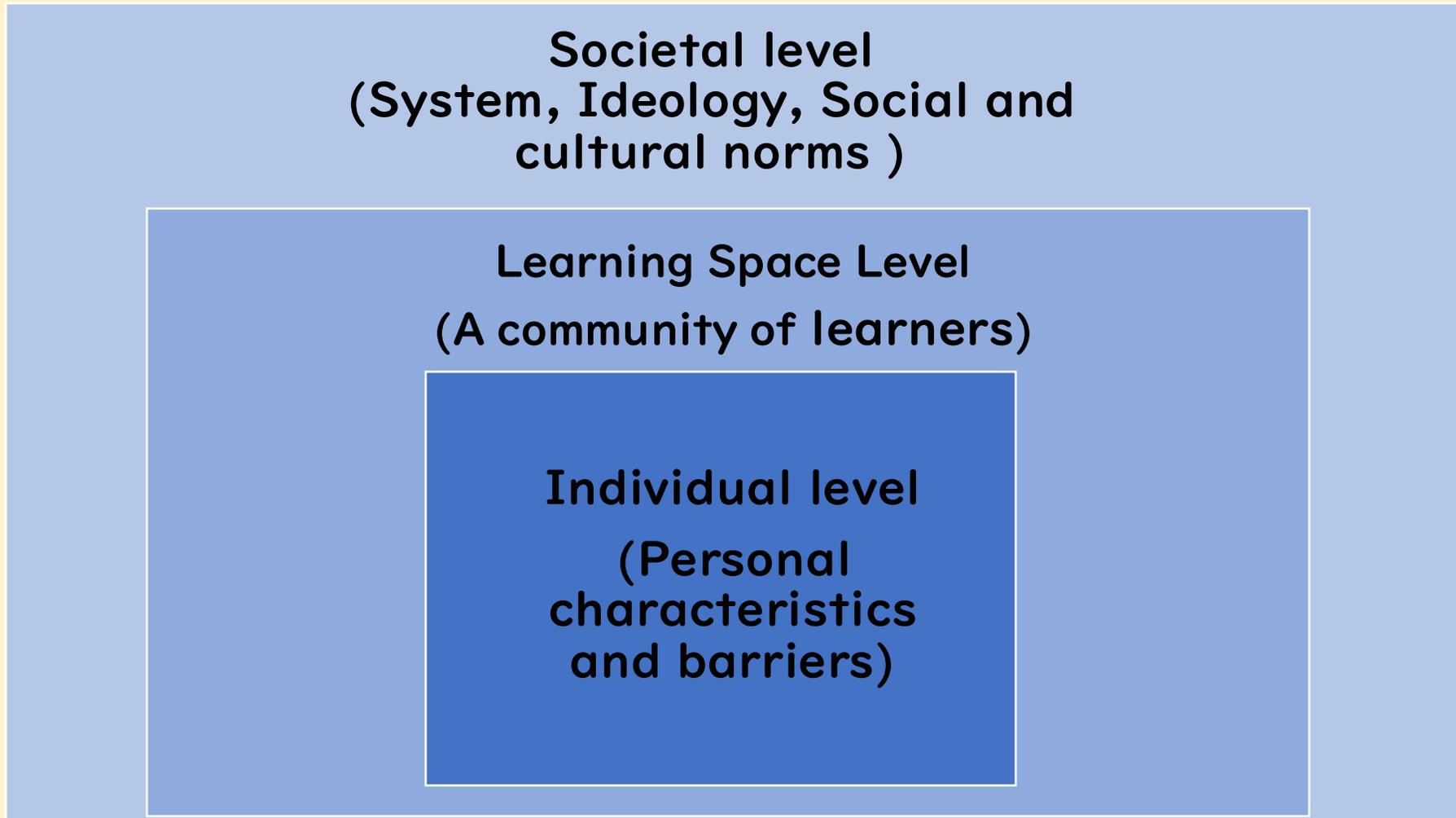
# 本ケース教材が想定している3つのレベル

社会レベル  
(制度、イデオロギー、常識)

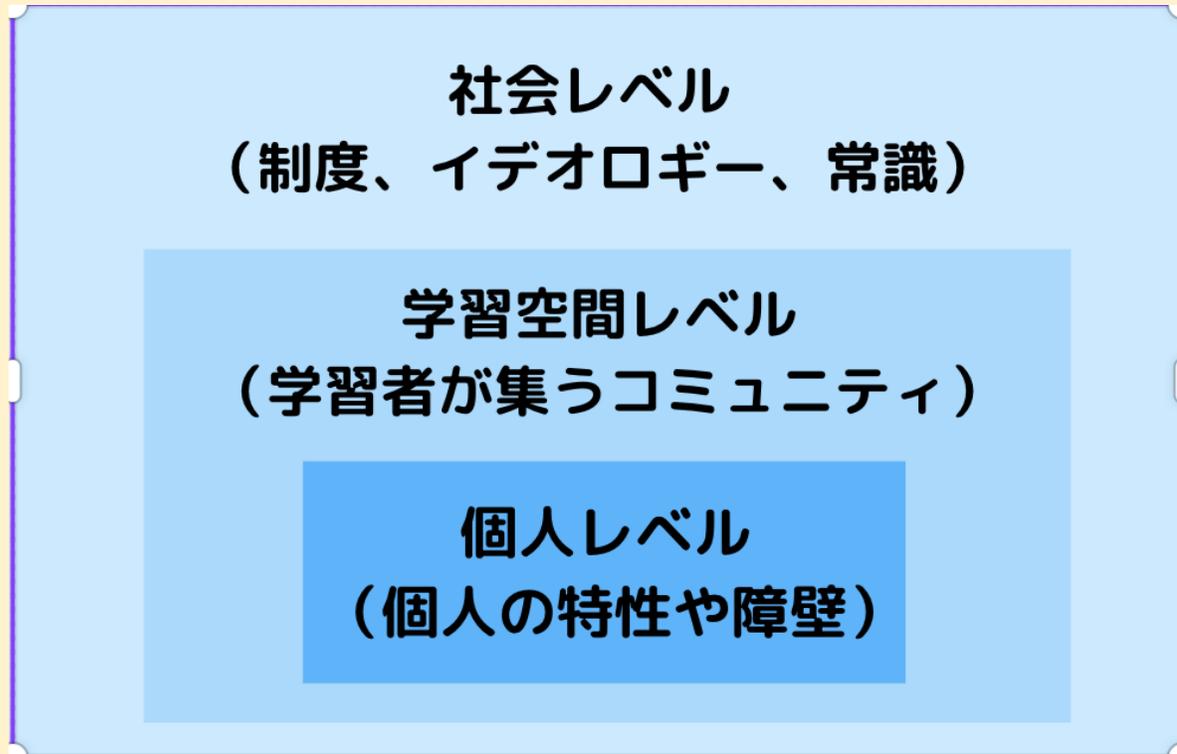
学習空間レベル  
(学習者が集うコミュニティ)

個人レベル  
(個人の特性や障壁)

# The three levels envisioned in this case study material



# 本ケース教材が想定している3つのレベル



「**個人レベル**」とは、

ある特性や障壁などに気づき、それを言語化することである。

具体的には、

このような学生は身近にいるか、どうしてこのような障壁が起きたのかを考える。

# The three levels envisioned in this case study material

Societal level  
(System, Ideology, Social and cultural norms )

Learning Space Level  
(A community of learners)

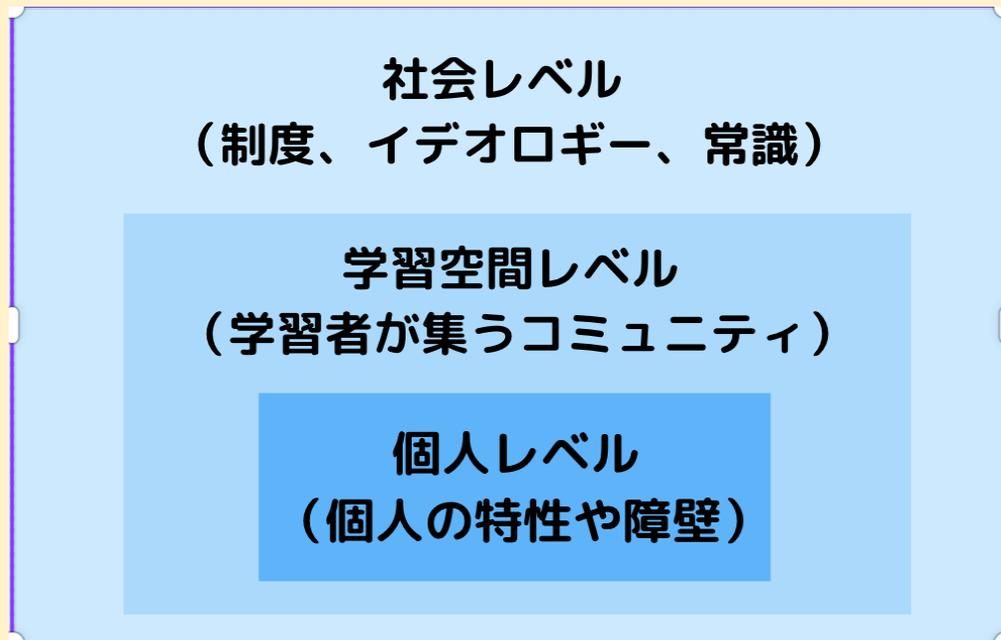
**Individual level**  
(Personal characteristics and barriers)

## “Individual levels”

refers to notice certain characteristics and barriers and verbalizing them.

More specifically, we think about whether such students existed around us and why these barriers occur.

# 本ケース教材が想定している3つのレベル



「**学習空間レベル**」とは、  
学生が集まるコミュニティ（例えば  
機関、現場）において起こる障壁を  
指す。具体的にはその障壁はなぜ起  
きるのか、学習において避けられな  
いものなのか、個人の努力で乗り越  
えるべきものなのか、既存の枠には  
問題はないのかなどについて考える。

自分が関わる教室、コースや制度、  
枠組みに固定観念、権力があるのか、  
それは変えるべきか、変えられるも  
のかなどについても問う。

# The three levels envisioned in this case study material

Societal level  
(System, Ideology, Social and cultural norms )

**Learning Space Level**  
(A community of learners)

Individual level  
(Personal characteristics and barriers)

**“Learning Space Level”** refers to barriers that occur in the community where students gather (e.g., institutions, sites).

In particular, we will consider points such as why those barriers occur; whether they are avoidable or not in learning; whether they should be overcome by individual efforts; and whether there are any problems with the existing frameworks.

We also question whether there are stereotypes and power influences in the areas that we are involved: classrooms, courses, systems, and frameworks; and whether they should or can be changed or not.

# 本ケース教材が想定している3つのレベル

社会レベル  
(制度、イデオロギー、常識)

学習空間レベル  
(学習者が集うコミュニティ)

個人レベル  
(個人の特性や障壁)

「**社会レベル**」とは、個人や学習空間を取り巻く制度、イデオロギー、常識などを指す。

例えば中国語を学ぶということはどのようなイメージを持たれ、どのように評価され、どのような教育がよいとされるか、そもそも高校・大学という学校社会、教育に携わる者の社会、ひいては日本社会がどのような構造になっているかについて考える。

# The three levels envisioned in this case study material

**Societal level**  
(System, Ideology, Social and cultural norms )

Learning Space Level  
(A community of learners)

Individual level  
(Personal characteristics and barriers)

“**Societal Level**” refers to the institutions, ideologies, and social and cultural norms that surround individuals and learning spaces.

For example, we will think about what kind of image people have of learning Chinese, how it is evaluated, what kind of education is considered good, how the communities of those involved in high school and universities, wider society of educators, and Japanese society as a whole are structured.

# 本ケース教材の使用を通し、期待される変化

## 1) 教育・学習観、役割観に関する省察

—技術革新、自身の常識（これが当たり前）と批判的に向き合う。

## 2) 想像力

—多様な学生のそれぞれ異なる背景に対する想像力を養う。

—マニュアルを求めようとしない教職員の態度を養う。

## 3) 対話の回路

—結局、理解できない

→理解できないからこそ、対話の回路を開く。



多様な学生が大学で息ができるようになる  
「暖かくななくても生ぬるい場」

# Expected changes through the use of this example material

## 1) Reflections on Views on Education, Learning, and Roles

- Critically confront technological innovation and one's own common sense ( the view of "this is normal [FOR ME]" )

## 2) Imagination

- Cultivate the awareness of diverse learners from different backgrounds.
- Cultivate the attitude within faculty and staff to not overly rely on manuals.

## 3) Dialogue circuit

- "I couldn't understand it after all."  
→ failure of understanding opens up opportunities for discussion.



**Students from any backgrounds will be able to learn comfortably.**